

## 北方ルネサンス

2012年11月2日(金)～2013年4月14日(日)

ブルー・ギャラリー(小) :



作品：クエンティン・マセイス作《デジデリウス・エラスムス》1517年

1450年から1600年にかけて北ヨーロッパでは大きな変化が見られた。この時代は一般に、14世紀以降イタリアで興った芸術と学問の変革に類似する北方ルネサンス期と呼ばれている。

しかし、北ヨーロッパのルネサンスはイタリアにおけるそれとは根本的に異なっていた。核心にあるのは、マルティン・ルターが始めたローマ・カトリック教会の教義に対する挑戦だった。キリスト教の基本的な信条をめぐる論争は北ヨーロッパの芸術に長期にわたる影響を与え、感情に訴えかける宗教画から肖像画や神話に題材を取った絵画など宗教とは無関係のものにいたるまで多くの面で変化をもたらした。こうした変遷に伴い絵画に対する需要も変わったため、芸術家たちは仕事を求めて都市から都市へと移り住んだ。

1450年頃にドイツで発明された印刷機によって、文書を大量に流通させることができるようになり、それに伴い思想も広く伝播されていった。多くの学者が、古典の中に人間の本質を求めたイタリアの人文主義者のアプローチを採用した。その中に、言語と神学に関する出版物でヨーロッパ中に名声を広めたデジデリウス・エラスムスや、その友人で法律家・政治家・思想家のサー・トマス・モアがいた。

北方ルネサンスの芸術家たちは、創意と美とすばらしい技巧を凝らした作品でこうした変革に応え、当時最も人々の心を惹きつける芸術品を生み出した。

ブルー・ギャラリー (大) :

アルブレヒト・デューラー



作品：アルブレヒト・デューラー作《聖アントニウス》  
1519年

アルブレヒト・デューラー  
(1471～1528年)

は北方ルネサンスで最も影響力のある芸術家だった。金細工師の息子で、1494年に生まれ故郷のニュルンベルクに自分の工房を開いた。この地で彼は、聖人像や聖書の物語から神話、肖像、当時の生活風景にいたるまで、多種多様な絵画と版画を制作した。

デューラーはすばらしい芸術家ということにとどまらず、才気あふれる起業家でもあった。彼は銅版画や木版画を中心に、

複数刷りが可能な版画の可能性を存分に活用した最初の芸術家で、こうして自分の作品を広く、しかも比較的安く流通させたのである。彼は、特徴のあるADのモノグラムを使って作品にイニシャルを入れることで名声を広めていった。1497年までには、外国の版画販売を取り扱う代理人を雇えるほどに成功を収めていた。デューラーが制作した版画は祈祷の際に使用されたり、壁や蒐集家のアルバムを飾ったり、模範として自分の作品に使うために芸術家たちが購入したりした。

1505年、デューラーは自分の目でイタリア・ルネサンスを見るためにヴェネツィアに旅した。彼は一年余りヴェネツィアにとどまり、ドイツ商人コミュニティのために幾つもの絵画を制作した。その後ニュルンベルクの自分の工房に戻って、1528年に没するまで主にここを活動の拠点とした。

## 神聖ローマ帝国の絵画



作品：ルーカス・クラナハ(父)  
作《アポロとディアナ》1526年頃

16世紀、神聖ローマ帝国は現在のドイツ、オーストリア、スイス、チェコ共和国、スロヴェニアにほぼ相当する領邦の連合体だった。皇帝マクシミリアン一世(在位1493～1519年)の治世には芸術が栄えた。そのマクシミリアン一世の《凱旋車》が近くに展示されている。

帝国の南部に暮らし創作を行ったデューラーの成功は、彼の工房で働いたハンス・バルドゥング・グリーンやハンス・ショイフェラインなど同時代の芸術家に影響を及ぼした。スイスのバーゼルも芸術活動の中心地だった。ここではハンス・ホルバイン(子)が画家として、また出版業者ヨハン・フローベンの挿画家として活躍したほか、ウルス・グラフが特異な版画と素描を制作し、市の造幣所の運営に携わった。

宗教改革の影響は神聖ローマ帝国で最も強く現れた。賢公フリードリヒ三世の保護の下に、マルティン・ルターがローマ・カトリック教会の根本理論に最初に疑問を投げかけ、ヨーロッパ中で論争の火ぶたが切られることになったのはヴィッテンベルクにおいてだった。フリードリヒの宮廷では、ルーカス・クラナハ(父)が神話や歴史を題材とした絵画を手がけた。クラナハが描く優美な裸体と北方の風景をモチーフにした緻密な描写は彼の工房の人気を高め、《ルクレティア》や《パリスの審判》といった主題で幾つものバージョンが制作されることになった。

レッド・ギャラリー：

ネーデルラントの絵画



作品：ハンス・メムリンク作《男の肖像》1480年頃

ルネサンス期のネーデルラントには、オランダ共和国のほか、現在のベルギー、ルクセンブルク、北東フランスの一部が含まれていた。1477年にマクシミリアン一世がマリー・ド・ブルゴーニュと結婚すると、この地はハプスブルク家の支配下となる。マクシミリアンの孫カール五世は神聖ローマ帝国とスペインならびにネーデルラントを継承し、その結果、ヨーロッパで最も権力を誇る統治者となった。

当時、ネーデルラントは交易の中心地として栄えた。ブルッヘ（ブルーージュ）は特に裕福な都市で、その成功ぶりは、ハンス・メムリンクやヤン・プロヴォーストなど数多くの芸術家の工房があったことでも分かる。その後、アントウェルペン（アントワープ）

が繁栄をきわめるようになると、ここはクエンティン・マセイス、ヤン・ホッサールト、ヨース・ファン・クレーフェといった画家の活動拠点となった。

宗教改革前は、ヤン・メルテンス作《マタイの召命》などの大祭壇画からヘラルト・ダヴィト作《ピエタ》など個人の瞑想用に制作された小作品にいたるまで、宗教画が絵画市場の重要な部分を占めていた。また、芸術の保護者たちが自分の肖像を後世に残そうとしたため、肖像画も人気が高かった。マリヌス・ファン・レイメルスワーレの《守銭奴》では、その人物描写は、他人から中傷される職業を嘲笑し、芸術が栄えることを可能にしたのも富であるとはいえ、富がはらむ危険に注意を向ける諷刺となっている。

北方ルネサンスはヨーロッパ全域でタペストリーの需要が著しく高まった時期とも重なり、1480年頃からブリュッセルはタペストリー生産の最も重要な中心地となった。移動できる家具調度としてタペストリーは便利なものだったが、同時に、そのスケールの大きさと高価な素材は所有者の富と権力を示すものとなった。



グリーン・ギャラリー：

フランスの絵画



作品：フランソワ・クルーエ作《スコットランド女王メアリ》1560～61年頃

する肖像細密画である。

1515年から1547年までフランスを統治したフランソワ一世はイタリア人芸術家の熱心な庇護者で、イタリアから重要人物を幾人も招き、その中にはレオナルド・ダ・ヴィンチ、ロッセ・フィオレンティーノ、フランチェスコ・プリマティッチオ、ニッコロ・デルアバーテがいた。

ルネサンス期のフランスの領土は現在に比べるとはるかに狭かった。フランス王国を統治していたのは、北ヨーロッパからイタリア半島にかけて支配していたハプスブルク家の神聖ローマ皇帝と対抗する有力なヴァロワ家だった。1559年にアンリ二世が没すると、アンリの未亡人カトリーヌ・ド・メディシスの影響下で年少の息子たちが続けて王位に就く。カトリーヌの摂政時代、フランスはカトリックとプロテスタントの抗争が続く内乱に苦しんだ。

こうした内戦状態にもかかわらず、芸術をこよなく愛したヴァロワ朝のフランス国王たちは壮大な美をふんだんに見せつけて権力を強めていった。宮廷では肖像画が盛んに描かれ、数多くの重要人物がジャン・ペレアルやジャン・クルーエ、フランソワ・クルーエに制作を依頼した。ジャン・クルーエ父子は精緻な細密画のほか等身大の肖像画も手がけている。ここに展示されているのは、最も初期の作品に属

ハンス・ホルバイン (子)



作品：ハンス・ホルバイン (子)  
作《デリッヒ・ボルン》1533年

ハンス・ホルバイン (1497/8～1543年)

は南ドイツで生まれた。1516年にスイスのバーゼルに移り、肖像画家、挿画家、ステンドグラスのデザイナーとして働いた。彼の雇い主の一人に大出版業者のヨハン・フローベングがいて、ホルバインは彼からサー・トマス・モアやデジデリウス・エラスムスが著した書物の挿画の依頼を受けた。

1526年までにはバーゼルにおける宗教上の変化から絵画市場が縮小していて、ホルバインはロンドンの地に仕事を求めた。彼はエラスムスがモアにあてた紹介状を携えてロンドンに赴き、イングランドで最初の仕事をモアから与えられた。1528年から1532年にかけてバーゼルに戻った期間を除き、その後ホルバインは生涯をイン

グランドで過ごした。1536年には既にヘンリー八世の宮廷画家という威信ある地位に就いていた。

ホルバインの絵画とその素描から、彼の創作方法について多くのことが見て取れる。ホルバインはチョークで実物のモデルの素描を手がけ、たいてはそれを油絵に仕上げた。ヘンリー・ギルフォードやウィリアム・レスキマーの肖像画とその素描を見ると、素描から完成画に移っていくときのホルバインの構想をたどることができる。

ホルバインの素描と絵画の重要な作品群がロイヤル・コレクションに現存している。素描はヘンリー八世の息子エドワード六世が所有していたもので、鋭い感覚と確かな腕でモデルを描くこの画家の初期の評価を示すものとなっている。